



亞 麻

—— 原文より ——

ア
ン
ダ
ア
セ
ン
作

平
林
廣
人
譯

亞麻の花ざかりでした。やわらかい、あをい花は、蟻のはねのやうにやさしく、いや、もつみ、もつみ綺麗に見えました。太陽はその上にかゞやき、雨雲は水をそゞぎかけてみました。恰うぎ、赤ん坊が、お湯を浴びさせてから、お母さんにキスして貰つて、いゝ氣持になつて、はしやぎたつやうに、亞麻はみんな嬉しがつてゐました。

「みんなの人が、わたしのこみを素晴しく立派になつたさいつて下さる」。さう亞麻はいひました。「その上、やがては、わたしは美しいリンネルきんねるの布きたになれるのだ。なんまいふ合せなこみだら

う。ほんまに、わたし位幸福なものは廣い世界に二人はあるまい。今では、こんなに愉快な日を送つてゐるし、そのうちにはまた、何にかになれるのだ。ああ、太陽はかゝやき、氣持のよい雨の行水で、すがくしくはなるし、まあ私くらゐ幸福なものは、めつたにあつたものではない。世界一の果報者といつたら、この私のことでせう。」

「さうだ、さうだ、尤もだよ！」かこひの棒枕ぼうぐひたちがいひました。「だがね、君！まだ、君たちは、世間を知らないのだよ。僕たちなんか、もう、ミづくに知つてるんだが、ごんな災難が、いつくるかわからないものだよ」。さういつたあこから棒枕たちは、悲しい音をたて、歌ひ出しました。

チヨツキン、ボツキン、ギツチラホイ、

バタバタ ヤツテモ オシマヒダ。

ウタノ モンク ハ キレチャッタ。

「そんなことがありますか」。亞麻はこたへていひました。「太陽は、毎朝のぼつてくるし、雨はちやんぱつてくれます。それで、わたしはこの通り伸びてゐるし、ミきがくればちやんぱ花も咲きま

す。わたしこそ一ばんの果報者ですよ。

ある日のこと、人がやつて来たかと思ふに、亞麻をあたまから、ひつ摺んで、根ごと、ぐいぐい引き抜いてしまひました。それこそみじめな目にあつたものでした。長い間、水につけられてしまつたので、もう溺れさせられるのではないかと思ひました、するに、今度は火の上にひろげられました。いやこれは焼きころされてしまふのかと思つて、氣が氣ではありませんでした。

「誰にしても、どう、いつまでもよろこばかりが續くものではない」。亞麻はかういひました。「何をするにも、さうすらくいくものではない」。

ほんごに言葉さうりに、困難がやつてきました。ぶたれて、くだかれて、もみぬかれて、梳すかれることいつたやうで、名のつけやうもない程はげしく扱はれた末は、石臺の上でがん／＼叩かれるので、考へを纏めるひまありませんでした。

「これで、わたしは、この上もない仕合せ者であつたのだ」。亞麻はこのいぢめ扱かれてゐる中でもさう考へてゐました。「誰でも、こんな時に、自分のかつてよかつた時のことを忘れずに、喜んで感謝しなければいけない。さうだ、あゝよかつた、よかつた……」――機はたぎ具にかけられた時でも、亞麻はまだ、さう言ひつゞけてゐました。「さうしてゐるうちに、さても立派な、廣いリンネルに織上げられました。一

本々々で生えて居つた亞麻はみんな一緒になつて、一枚の布に仕上げられました。

「ヤア、一つたいこれはぎうしたさいふこじだ！こんなにならうきは全く思ひも及ばなかつたこじだ！ああ、何んさいふ仕合せなこじになつたものだ！ねえ、棒杭たち、君たちが、そら、いつか歌つて聞かせてくれた、あの

チヨツキン、ボツキン、ギツチラホイ、

バタバタ ヤツテモ オシマヒダ、

の歌のほんごの説明が聞かせて貰いたいのだね。『ウタノモンクハケツシテキレマセヌ』私の歌の文句はやつここれからだ！。素晴らしい文句がね！、やあ、おかげで、わたくしもすこしは世間を見て、いくぶんか、ものになりかけて來ました。これで一ばんの果報者さいへるでせうよ！—私はミても強くて、肌ざはりがよくて、色は眞白で、たけさいつたらさても長いものですよ！あの畑でせいふく、あをい花を咲かせてゐた頃のわたしは、まるで異つたものです！雨でも降らなければ、水がほしくても、誰も見てくれるものもなかつた、あの頃は雲泥のちがひです！今では朝には朝で若い女中が何んでもしてくれるし、夜には夜で毎晩水槽の水で灌水浴までして貰へるのです。ああ、それから、あの牧師さんの

夫人が、いつか私たちのこゝを話してゐたこゝがりましたよ、私こそ、村で一ばん上等の布だき、さういつてゐました。まあ、わたし以上の果報者はさう、ありますまいね』。

布はそれから仕立屋に持ちこまれて、裁ちきられるこゝになりました。ひびくは容赦なく、きつてばらくにした上で、縫針で、ちくちく刺しまはしました。こんなこゝは決して氣持のよいものではありませんでした。だがその結果、布は十二着の着物に仕立上げられました。これはいふまでもなく、すべての人間になくはならないものです。

「さて、私もこれで、はじめてひきかぎのものになつたのだ！これでわたしのほんごの役割がはつきりし、きまつたわけだ！さうだ、これこそ全く、恵まれたものだ！よし、わたしも、人並に世界の舞臺に上つたからには、自分の役目をぎこちまでもやり通して見やう、これがこの世に出たものゝ務めなんだ。これがほんごの喜びといふものだ。私たちは十二にも分割されたさはいふものゝ、みんな同じ型に仕立てられて、十二が十二みんな揃つて、一ダースでゐられるこゝを考へて見ても、こんな果報者が、またさあらうとは思はれない」。

それから年へたのち―皆のものが、もう一つしよではなかつた。

「いつか一度はこんなこゝになるのだ、こゝは思つてゐた」。その着物もめいづくにさういつてゐまし

た。「それは少しだつて長く一しよに居たいこゝは、山々でけれきもそんな無理を通しきるこゝは出来ないのだ」。それだけならまだよいが、今度はそれがまたばらばらに解きほぎかれた上で、ずた／＼に摧かれてしまつたのです。ます／＼細かにきりこまざかれ、粉みじんこなにされて、たう／＼釜にまでも投げ入れられてしまひました。今度こそ、いよく煮殺されてよだけの覺悟はしたもので、その先きさうなるこゝか、一向に見當がつきませんでした。――こゝろが、その結果はミても綺麗なまつ白い紙に漉すかれたのでした。

「いやはや、これはまた素敵だ！まつたく素晴しいものになつたものだ！」こ紙がいひました。「わたしも今では、昔ミは打つてかはつて立派になつたものだ。これでいよく、何か意味のあるこゝでも書いて貰へるわけだ！いや、かりになんにも書いて貰へないにしても、これだけでも、私は十分に果報者といへるのだ」。

それから間もなく、紙には物語のなかでも、すぐれた物語ばかりが書きあげられて、大勢の人々に讀んで聞かせられるやうになりました。この物語はたい／＼い、善良ぜんじやうお話ばかりであつたものですから、世の中の人たちがだん／＼よくものがわかるやうになつて、心からしんせつになつて來ました。それで、この紙に書かれた言葉は、さゝでも大歓迎をうけるやうになりました。

「こんなこゝは、わたしがまだ、あの畑であをい小さな花をつけてゐた頃には、夢にも見られなかつた

「こゝだ！、こんなにして世間の人たちによろこびをもち、喜びをわけてあげる者にならうとは、全く思ひもかけないこゝだであつた。今でも、さうしてかういふこゝになつたか、わたし自身にもわからないこゝだ！だが事實はさうまでも事實だ！わたしはたゞ、貧しい境遇に置かれてゐたこゝで、ありつただけの辛棒をして來ただけで、わたし自身にやつたこゝはなに一つこゝしてなかつたのだ。一切は神さまのお胸のうちにあるこゝだ。

考へて見るに、なにか一つの事柄に出あふに、その度こゝに、神さまは、わたしをつぎからつぎへこ進めて、前よりも、もつこ名譽のあるかへこつれ出して下さつたのだ。いよいよわたしの『ウタノモンクモキレチャウ』のかこ思はれるやうな場合にたちいたるに、それもしばらくの辛棒で、まもなく素晴らしい發展をさせられて、いつでも前よりは、すつこ上で、すつこひろくした境遇がひらかれる機會になつたものであつた。さあこの調子でいくに、今度こゝいふ今度は、旅行に出られるやうな氣がする。世界中の人に讀んで貰ふために、世界旅行に出かけられる時が到來したこゝいふものだ。昔あのをきて、小さかつ花が、今ではかうして、素晴らしい立派な思想の花ざかりになつたのだから、それ位のこゝは當然な話だ。わたしこそ、ほんまに果報者の中での果報者こゝいふものだ。」

だが、この紙は旅行に出るこゝろか、印刷屋につれて行かせられました。そこで紙にかいてあるだけの文字を、のこらず印刷にして、本にするこゝになつたのです。それはその筈です、たゞペンで書いた、

たつた一枚の紙が、ひきりで世界旅行に出たところで、途中で、すりきれてしまつて、出来るだけ大勢の人たちに、よろこんで読んで貰へるわけにはいかないのです。で、こゝで何百冊にでも澤山の本にするこゝになつたのです。

「さうだ、やつぱり、それが今のわたしにこつては一生うよいこなんだ！」ペンでかゝれた紙は、かう考へついたのでした。「世界旅行なごこいふこゝは、もごく、思つても居なかつたこゝだ。わたしは家にゐる方がよいのだ。年寄のをぢいさんたちと同じやうに、誰からでもだいじにして貰つてゐるこゝもわるくはない。ペンから流れ出した言葉が、直接に書きこめられてゐるものは、現に、このわたしのほかにほゐらないのだから、わたしこそ、ちゃんま家に居て、あの大勢の本たちに、走りまわつて貰ふ方がよいのだ。これでやつこわたしも静かに納まつてゐられるこゝいふものだ、あゝ、ありがたいこゝだ、ほんまに果報者まは、このわたしのこゝだ！」

紙はこんきは、一さたばねに結えられて、天井裏に投げこまれてしまひました。

「ひこ骨折つたあまでは、まあゆつくりまゝ休みするのまわるくはない」。紙はかういひました。「獨りになつて、自分の考へを纏めたり、反省してみるこゝは、何より大切なこゝだ。いま、はじめてわたしは、自分が何んであるかまゝいふこゝを、正しく見るこゝが出来た。いかにも、自分自身を知るまゝいふこゝは、すべての進歩の基となるものだ。さてそこで、つぎに起つてくるこゝは何だらう？世の中まゝい

ふものは、少しも停滞するこゝもなく、つぎからつぎと、断えず新しい事件が起きてくるものだ！」。

ある日のこゝ全部の紙が、持ち出されて大きな爐のなかに入れられるこゝになりました。もう間屋におろすわけにも行かなければ、バターや赤砂糖の包紙のやくにもたゝないので、焼き捨てられるこゝになったのです。家中の子供が、みんなまはりに集つてきました。それは焼けたあゝで、燃えがらの中から、眞赤に光る美しい火花が、かぞへきれない程たくさんに出て、たがひに入り亂れて、さんだり、はねたりするのが面白かったです。

恰うさ、學校から大勢の子供たちが、ぎつぎはしり出すやうに、にぎやかに飛び散るかと思ふと、子供がすつかり出きつたあゝで、間をおいて、急に校長先生がぬつみ出てくるやうに、忘れた頃になつて最後のくゝりでもつけるのか、大きな火花がこび出したりするこゝいふので、子供たちはじつと、まはりで見つてみました。

紙は全部はこび出されて、いよく火がつけられました。

イヤァ！火が燃えついた！「イヤァ！」こゝいふまもなく、べちちと燃えあがつて、大きな炎は火道を高くのぼつて行きました。亞麻のあをいやさしかつた花なんかでは、こゝても及ばない程高くのびていきました。それから、さんなによく晒された白リンネルでもかなはない程かゞやいて燃えたちました。書

きつけられてあつた文字は、一瞬間に眞つ赤になつて、ぎんな言葉も、思想もすっかり燃えあがつてしまひました。

「こんごは、僕は太陽のまごころまでも、昇つて行くんだ！」と火の中でいふ聲がしました。これは無数の炎が異口同音に叫んだ言葉でした。それから炎はみんな足並をそろへて、勢よく煙突を通り抜けて、ぎんぐ、ぎび出していきました。―それから、炎よりもすつと美しい、人の目にはまもらない程、小さいものになつて、恰うき亞麻があつた畑のやうに咲きさかつてゐた頃のやうに、空いつぱいにひろがつていきました。この小さいものは、自分を生んでくれた親の炎よりは、はるかに軽くつて、生きてゐるものですから、自由自在に天にのぼつて行きました。さうして紙の焼あごには、眞つ黒になつた燃えがただけが残りました。その中で眞つ赤な火花は思ふ存分に踊りました。踊りぬいたあごで、一ミ休みましたかと思ふと、最後にひきつ、大きな火花が飛び出して踊りました。それですつかり、おしまひになりました。ほんごに「學校から大勢の子供たちがはしり出して、一つこゝろあごから、校長先生が、ぬつと出ていつた」のでした。さうして踊つたものゝ足が觸れたまごころには、全部足跡がのこつて見えてゐました。見てゐてもそれはとても愉快なものでした。家の子供たちは、すつかり燃え落ちた灰を見ミッけるまご立ち上つて歌ひ出しました。

チヨキン、ボッキン、ギツチラホイ、

バタバタ ヤツテモ オシマヒダ、

ウタノ モンクハ キレチャッタ。

けれど、あの無数の目にも見えない小さいものが、みんなでいひました。「ウタノモンクハケツシテキレマセン！」すべてのものは、それぞれに一番幸福なところに居るのです！、わたしはこのことを知つてゐるので、やはり果報者の中での果報者です」。

けれど、この子供たち、まだ小さかつたので、その聲も聞えなければ、意味もわかりませんでした。すべて、ものを全體から見るとこの出来ない幼稚なものには、いつまでたつても、この聲は決して聞えもしなければ、またわかりもしないのです。(終)